



風景との出会いが楽しい ～気ままにぶらりスケッチ～

南雲義男さん

目線が低く分かりやすい入門書を作るのでは」と2012年4月には、初心者向けのスケッチ本を出版し、絵を描くことの楽しさを広める活動にも力を入れていま

100%現地主義

写真を撮って自宅で描く方も多
いですが、南雲さんはその場で描
きます。「現地で気温や日光、風
を直接肌で感じながら描くと、そ
の場の雰囲気や画面に現れて良く
伝わるし、その時々光の加減に
よる明暗など、写真では分かりに
くい微妙な色合いもしっかりと把
握できる」とのこと。また、「風
景を目の当たりにして描いた絵
は、景色が目には焼き付いて心のな
かに残っているのか、ずいぶん前
に描いたものでも当時のシーンが
はつきりと浮かんでくる」そう
です。

「見たままの風景を短時間で描
くことで、作品に臨場感や個性が
生まれる」と自身のこだわりを語
る南雲さん。現場で描いたスケッ
チが味わいのある絵に仕上がった
時の満足感は格別だそうです。

野外スケッチの魅力

野外スケッチの魅力を伺うと、
「さわやかな外気のなかで絵を描
くとストレス解消にもなり、季節
の移り変わりに敏感になります。
また、歩くことは健康づくりにも
つながり、お金をかけずに楽しむ
ことができる」と楽しそうに話さ
れます。

「暑い日や寒い日など、野外で
描くのは厳しい時もありますが、
厳しい環境で描いた作品にはそれ
なりの強い思いがあるので記憶に



スケッチ終了後は、会員の皆さんが描いた作品を並べて講評を行う



秋津にあったしょうゆ工場を描き、作品の成果を前に皆で記念撮影

残る。また、季節にはそれぞれの
趣があり、絵の材料は尽きない」
と言います。

南雲さんが主宰するスケッチ会
の会員は高齢の方が多いそうで
が、80歳以上の方も元気に活動し
ているとのこと。会員の皆さんも
野外スケッチの魅力にはまってい
るのでしよう。

西武線全線を制覇

昨年10月に、西武線全92駅を巡
り描いた165作品を一冊の本にまと
めた南雲さん。初めは清瀬市内を



西武線全線全駅の作品が、親しみやすい
タッチで描かれ、コメント付きで紹介さ
れている。(市内各図書館で閲覧可)

中心に絵を描いていきましたが、個
展を開く度に来場者から、「自分
の住んでいる地域も描いてほし
い」と言われるようになり、徐々
に遠くの地域にも足を延ばすよ
うになったそうです。やがて、「ど
うせなら全部の駅を描いちゃお
う」と思い、約10年かけて西武線
沿線の風景スケッチを描かれまし
た。

題材は駅を降りてから歩いて探
します。気に入った場所を見つ
けるとその場でスケッチブックを開
くのが南雲さんのスタイル。題材
を探して歩き続けるうちに、3駅
先の駅に着いたこともあったそう
です。作品のなかには、駅前開発
などで今では消えてしまった風景
を切り取ったものもあります。

偶然の出会いが面白い

南雲さんは、最初は名所や観光
地などを中心に描いていました
が、描ける場所に限りがあるため
だんだん行き詰まってきたそう
です。その後、絵の幅を広げたい
と思い取り組んできたのは「自分
目で探す」こと。「初めて訪れた
場所まで右に行くか左に行くか、こ
こが楽しみの広がるスタート地点
です。感動する風景との出会いを
期待してぶらりぶらりと歩いま
す」とほほえみます。

普段は週2、3回、健康も兼ね
てスケッチに赴き、1作品は約1
時間で完成させるそうです。多い
時は1日3枚も描くとのこと。



スーの先がす
る「軸芯フ
活字」の軸
活字。新し
造野
がフと造
野
さチグ引
雲ットを
南ケマ系
が

清瀬市内の小道。ダーマットグラフで描
いたもの(左)は鉛筆で描いたもの(右)
と比べ線に迫力が出る



そして、「作品を描く時は、一
発勝負。間違えても消しゴムで消
えない鉛筆で描きます。一気に描
くときに消しゴムを使っている時
間はないので、致命的な間違いで
なければ、そのまま残すことで動
きが出て、かえって面白い効果が
出ることがあるし、だからこそ短
時間でできとできる。ただ、『早
く描く』と『雑に描く』とはまっ
たく違う。ポイントとなる主体の
線はしっかりと描き、他は一筆書き
的に一気に描き上げる」と語りま
す。

出かける前に地図で調べたりは
せず、行き当たりばったりで道路
を歩いていると「この先は何かあ
りそうだ」など、なんとなく肌で
感じられるようになるそうです。
1万歩くらい歩いて描きたい風
景が見つからないこともあるそう
ですが、そんな時は「よく歩いた
から足腰を鍛えることができた」
と気持ち切り替えるそうです。

また、近代的な建物が多い街よ
り、古い建物などレトロな感じを
好む南雲さん。例えば市内では、
秋津のしょうゆ工場が格別に好き
だったそうですが、今では取り壊

されて更地になってしまっていま
す。「最近では、宅地開発などで昔
の建物がどんどんなくなってきた
います。駅舎も奇麗になってきて
いますが、描く題材が減るのは少
しさみしいです」と心境を語りま
した。

上達の「コツ」とは

絵がうまくなるためには、1枚
でも多く描くことが大切で、最大
の要因は「継続すること」と「楽
しんで描くこと」だそうです。

「急激に夢中になって急激に熱
が冷めるということにならないよ
うに、牛歩のごとく一歩ずつ確実
に歩んでいくような気楽な気持ち
で進んでいくと、一生楽しめるも
のになる」と話されました。また、
「自分のペースを積み重ねる他に、
目標を持つことも大事。例えば作
品を展示したり、同士の仲間を持
つこと。何年も続けるうちに壁に
ぶつかるともありますが、互い
に助け合ったり励まし合ったりす
ると続けていくことができる」と、
上達のコツを教えてくださいました。

今後も気ままに

今後の目標を伺うと、「一大目
標の西武線ぶらり旅を成し遂げた
ので、特に大きな目標は決まってい
ませんが、遠くの方にも足を延
ばしたい」と楽しそうな様子。

時間があればスケッチブックを
持って歩きまわるスタイルは、今
では完全に南雲さんの生活の一部
です。「野外に出かけられる体調
と、のんびりと絵を描ける環境に
感謝しつつ、今後も気ままにぶら
り風景を描き続け、ささやかな
趣味を楽しんでいきたい」と話さ
れました。